様式４

大学等名 東北福祉大学

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

高度情報教育推進委員会

（責任者名） **大内　誠**　　（**役職名**）**共生まちづくり学部　教授**

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	高度情報教育推進委員会は，教務課と連携し，当該教育プログラムを構成する各科目について，受講者毎の履修状況や課題への回答状況，および単位取得状況を把握している。令和7年度に当該教育プログラムを構成する科目を履修した者はのべ 815 名であり，全学生数を分母とすると，履修率は約15％であった。なお，プログラム開始時から令和7までの履修者はのべ2,418名となった。今後も全学的な周知を行いながら，履修者および修得者の増進を目指す。なお、履修者数の増加に伴い，今年度より「AIの基礎」を前後期に開講することにした。「情報の科学」においては，履修者数が令和４～6年度の約6倍にも達したため，対面授業の特性を活かした，いわゆるインタラクティブな授業を展開することは難しくなった。今後の授業設計の課題としたい。
学修成果	令和7年度は，当該教育プログラムの科目「統計情報を見る眼」において，LMS（UNIVERSAL PASSPORT RX）を活用している。「統計情報を見る眼」の確認テストでは，平均点が87点となり、高い学習成果が得られたといえる。「AIの基礎」では2回の到達度確認テストを実施し，学修状況の確認を行った。加えて最終評価のためAIソフトウェア（画像認識ディープラーニングアプリ）の開発課題を与え，機械学習に必要なデータの収集から機械学習，そして，学習結果の検証までの一連の流れを理解できるように配慮した。「情報の科学」においては，これまでと同様に，①社会福祉の観点から情報が私たちの社会生活にもたらす利点と欠点について，②リスクマネジメントの観点からの情報のあり方，③安全な医療の提供と健康維持への取組におけるICTの活用，の3項目について，ICT活用領域におけるセキュリティの脆弱性や情報リテラシーの格差といった今後の課題について意見を求めるレポートを課した。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本教育プログラムの受講者全員に対して授業評価アンケートもしくは本プログラム独自のアンケートを実施し，その結果は当該教育プログラム科目である「情報の科学」「AIの基礎」「統計情報を見る眼」の担当教員に個別にフィードバックされ，分析している。アンケートから，授業の冒頭での到達目標の紹介と，終盤での到達度の確認の時間を確保すること，授業資料のわかりやすさ，授業の内容に対する質問環境について肯定的な意見が寄せられ，多くの学生が各回の授業内容を一つずつ着実に理解できたと考えられる。一方，「情報の科学」においては，前述のように履修者数が急増したため，理解度についてもばらつきが生じたことは否めない。こちらも併せて今後の授業設計における課題としたい。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	本学では半期ごとに授業評価アンケートを実施している。同アンケートには，指導の適切さや授業の工夫といった内容を確認する項目があり，その結果を見ると3科目ともおおむね良い評価が得られていたことから，学生間でも推奨されうる科目であったと捉えている。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本教育プログラムを構成する「情報の科学」「AIの基礎」「統計情報を見る眼」は、令和4年度から全学の選択科目として開講されている。各学科での履修ガイダンスや大学のWebページ，学生便覧等を通じて広く周知を行い，履修者数および履修率の向上に向けて推進してきた。さらに本年度は、プログラム修了証の発行に加え，一部科目をフルオンデマンド化することで履修機会の拡充を図った。その結果、プログラム開始4年目となる今年度は，全体で延べ815 名の履修者があった。今後は，数理・データサイエンス・AI教育の内容について各専門分野の視点も取り入れながら，プログラムの見直しと改善を進め，学生の履修を一層促進していく。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和4年度よりスタートしたため，未だ本プログラムを修了した卒業生は少ない。今後既卒者を対象としたアンケート調査の設問内容に，当該科目での学びが卒後の進路選択や就職先での業務への寄与度に関する内容を含めて実施する予定である。また，卒業生の就業先へのアンケート調査の項目にも，本学卒業生における当該科目履修者と非履修者との差異，あるいは他大学におけるプログラム修了者との差異について問う設問を加え，プログラム全体の改善に向けた資料とする予定である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本学では，地方自治体や民間企業等との連携を深め，地域の活性化に貢献することを目指している。これらの協力団体の一部より，教育プログラムの講義内容及び実データを活用した演習等の手法について個別にインタビュー行った結果，在学中に数理・データサイエンス・ＡＩに関する知識・技術を獲得することへの期待は，決して高くはないことが判明した。そこで，本学では，知識・技術の習得をプログラムの主眼とするのではなく，AIやデータサイエンスの活用の背景にある「デジタル社会」や「データ・ドリブンの意思決定」などの概念を把握するとともに，今後の国際社会におけるAI活用のメリット・デメリットについて理解し，AIの適切な活用のためのリテラシーを身につけることに重点を置くプログラムとしていく。
数理・データサイエンス・ＡＩを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	モデルカリキュラムリテラシーレベルの導入部分に準じた内容を展開し，時事やトレンド，身近な事柄など社会での実例をもとにAIやデータサイエンス等がどのような活用をされているかを中心に好奇心を促す講義内容としている。特に「AIの基礎」においては，座学だけではなく，Pythonプログラミングや代表的なAIアルゴリズムの開発をハンズオン形式で学ぶことにより，AI開発へのハードル意識を下げ，ものづくりの楽しさを味わえるよう工夫をしている。また，生成AIによって文章の生成，要約，翻訳，さらには画像や動画の生成まで行うことができ，大学における授業や研究はもとより，社会に出てからも学んだことを活かせることを強調している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	高度情報教育推進委員会にてLMSに実装されている授業評価アンケートの意見を参考に，学生の「分かりやすさ」の観点から講義の内容・実施方法の見直しを検討している。特に「AIの基礎」では，オリジナルのテキスト（PDF）やサンプルプログラムを作成し，学生たちに無料で配布している。これにより，学生は自宅で予習復習が可能となり，初学者にとっては難解と思われがちなAI開発の手順や技法を分かりやすくしている。加えて，LMSのQ&Aの活用を推奨し，分からない点があればすぐに質問できるように授業の雰囲気形成を行った。また，「情報の科学」では，LMSを用いて，各回の講義内容に合わせて作成した動画コンテンツを授業実施前に配信し，講義内容の予習を可能にしている。各コンテンツは，授業期間終了まで視聴可能なため，必要に応じて復習やレポート作成時の参考としても活用できる。さらに，さらに，「統計情報を見る眼」では，演習課題を拡充することで，授業内容の理解を深める工夫を行っている。